

§3.7 ベクトルの線形独立

複数のベクトルについて“線形独立”及び“線形従属”という概念があります；これらは、初めは意味が分かりにくいかもしれませんが、後々重要になる概念です。

定義 実ベクトル空間のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とが線形独立であるとは次の条件である：

任意の実数 p と q について、 $p\mathbf{a}+q\mathbf{b}=\mathbf{0}$ ならば $p=q=0$.

実ベクトル空間のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とが線形従属であるとは、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とが線形独立でないことである。

例題 ベクトル平面のベクトル $(2,3)$ と $(4,5)$ とは線形独立であることを示す。

実数 p と q について $p(2,3)+q(4,5)=\mathbf{0}$ とする。

$$(2p+4q, 3p+5q) = (0, 0),$$

$$2p+4q=0 \text{ かつ } 3p+5q=0 .$$

$2p+4q=0$ より、 $p+2q=0$, $p=-2q$, これを $3p+5q=0$ に代入すると、

$3(-2q)+5q=0$, $-q=0$, $q=0$; 更に $p=2\cdot(-2q)=0$. このように、

$p(2,3)+q(4,5)=\mathbf{0}$ ならば $p=q=0$. 故にベクトル $(2,3)$ と $(4,5)$ とは線形独立である。 終

次の定理の証明は後にします。

定理 3.7.1 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} について、

$$\mathbf{a} // \mathbf{b} \iff \mathbf{a} \text{ と } \mathbf{b} \text{ とは線形従属である .}$$

このように、2個のベクトルについて、“線形従属である”ことは“平行である”ことは意味が同じです。

定理 3.7.2 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} について、

$$\mathbf{a} \text{ と } \mathbf{b} \text{ とは平行でない} \iff \mathbf{a} \text{ と } \mathbf{b} \text{ とは線形独立である .}$$

証明 定理 3.7.1 より、

$$\mathbf{a} \text{ と } \mathbf{b} \text{ とは平行でない} \iff \mathbf{a} \text{ と } \mathbf{b} \text{ とは線形従属でない}$$

$$\iff \mathbf{a} \text{ と } \mathbf{b} \text{ とは線形独立である}$$

(証明終り)

以下の定理の証明は後にします。

定理 3.7.3 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とが線形独立であるならば、任意の実数 p, q について、

$$p\mathbf{a}+q\mathbf{b}=\mathbf{0} \iff p=0 \text{ かつ } q=0 ,$$

$$p \neq 0 \text{ または } q \neq 0 \iff p\mathbf{a}+q\mathbf{b} \neq \mathbf{0} .$$

定理 3.7.4 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} について、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とが線形独立であるならば、任意の実数 p, q, r, s について、 $p\mathbf{a}+q\mathbf{b}=r\mathbf{a}+s\mathbf{b}$ ならば $p=r$ かつ $q=s$.

例題 実ベクトル空間のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とは平行でないとする。次のような実数 x と y とを求めよ： $(2x+3y+4)\mathbf{a}+(5x+6y+7)\mathbf{b}=\mathbf{0}$.

\mathbf{a} と \mathbf{b} とは、平行でないので、線形独立である。定理 3.7.3 より、

$(2x+3y+4)\mathbf{a}+(5x+6y+7)\mathbf{b}=\mathbf{0}$ となる条件は、 $2x+3y+4=0$ かつ $5x+6y+7=0$; この連立方程式を解くと $x=1$ かつ $y=-2$. 終

問題 3.7.1 実ベクトル空間のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とは平行でないとします。次のような実数 x と y とを求めなさい： $(2x+3y-4)\mathbf{a}+(6x+7y-8)\mathbf{b}=\mathbf{0}$.

例題 実ベクトル空間のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とは平行でないとする。次のような実数 x と y とを求めよ： $(5x-4y)\mathbf{a}+(7x-6y)\mathbf{b}=7\mathbf{a}+9\mathbf{b}$.

\mathbf{a} と \mathbf{b} とは、平行でないので、線形独立である。定理 3.7.4 より、

$(5x-4y)\mathbf{a}+(7x-6y)\mathbf{b}=7\mathbf{a}+9\mathbf{b}$ となる条件は、 $5x-4y=7$ かつ $7x-6y=9$; この連立方程式を解くと $x=3$ かつ $y=2$. 終

問題 3.7.2 実ベクトル空間のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とは平行でないとします。次のような実数 x と y とを求めなさい： $(5x+6y)\mathbf{a}+(7x+8y)\mathbf{b}=2\mathbf{a}+4\mathbf{b}$.

例題 実ベクトル空間のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とは平行でないとする。次のような実数 x を求めよ：ベクトル $x\mathbf{a}+3\mathbf{b}$ と $2\mathbf{a}+7\mathbf{b}$ とが平行である。

\mathbf{a} と \mathbf{b} とは、平行でないので、線形独立である。定理 3.7.3 より、 $2\mathbf{a}+7\mathbf{b} \neq \mathbf{0}$.

定理 3.5.4 より、 $x\mathbf{a}+3\mathbf{b} // 2\mathbf{a}+7\mathbf{b}$ である条件は、ある実数 k について

$x\mathbf{a}+3\mathbf{b}=k(2\mathbf{a}+7\mathbf{b})$ つまり $x\mathbf{a}+3\mathbf{b}=2k\mathbf{a}+7k\mathbf{b}$. \mathbf{a} と \mathbf{b} とは線形独立なので、

定理 3.7.4 より、 $x=2k$ かつ $3=7k$. これらの方程式より $x=\frac{6}{7}$. 終

問題 3.7.3 実ベクトル空間のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とは平行でないとします。次のような実数 x を求めなさい：ベクトル $x\mathbf{a}+3\mathbf{b}$ と $2\mathbf{a}-5\mathbf{b}$ とが平行である。

問題 3.7.4 実ベクトル空間のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とは平行でないとします。次のような実数 x を求めなさい：ベクトル $x\mathbf{a}+2\mathbf{b}$ と $3\mathbf{a}+x\mathbf{b}$ とが平行である。

3次元ベクトル空間では、2個のベクトルに関する線形独立の定義は3個のベクトルに関する線形独立の定義に拡張できます。

定義 3次元の実ベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} とが線形独立であるとは次の条件である：

任意の実数 p と q と r について、 $p\mathbf{a}+q\mathbf{b}+r\mathbf{c}=\mathbf{0}$ ならば $p=q=r=0$.

3次元の実ベクトル空間のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} とが線形従属であるとは、 \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} とが線形独立でないことである。

定理 3.7.5 3次元実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} について、 \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} とが線形独立であるとき、任意の実数 p, q, r について、

$$p\mathbf{a}+q\mathbf{b}+r\mathbf{c}=\mathbf{0} \iff p=0 \text{ かつ } q=0 \text{ かつ } r=0 ,$$

$$p \neq 0 \text{ または } q \neq 0 \text{ または } r \neq 0 \iff p\mathbf{a}+q\mathbf{b}+r\mathbf{c} \neq \mathbf{0} .$$

定理 3.7.6 3次元実ベクトル空間の実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} について、 \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} とが線形独立であるならば、任意の実数 p, q, r, s, t, u について、 $p\mathbf{a}+q\mathbf{b}+r\mathbf{c}=s\mathbf{a}+t\mathbf{b}+u\mathbf{c}$ ならば $p=s$ かつ $q=t$ かつ $r=u$.

——— 定理の証明

定理 3.7.1 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} について、

$$\mathbf{a} // \mathbf{b} \iff \mathbf{a} \text{ と } \mathbf{b} \text{ とは線形従属である .}$$

証明 $\mathbf{a} // \mathbf{b}$ と仮定する。 \mathbf{a} と \mathbf{b} とは、同じ向きであるかまたは逆の向きである。

定理 3.4.4 より、 $|\mathbf{a}|\mathbf{b}=|\mathbf{b}|\mathbf{a}$ または $|\mathbf{a}|\mathbf{b}=-|\mathbf{b}|\mathbf{a}$. よって、 $|\mathbf{b}|\mathbf{a}-|\mathbf{a}|\mathbf{b}=\mathbf{0}$ または $|\mathbf{b}|\mathbf{a}+|\mathbf{a}|\mathbf{b}=\mathbf{0}$.

どちらのときも、 $|\mathbf{a}|\neq 0$ または $|\mathbf{b}|\neq 0$ のとき、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とは線形従属である。 $|\mathbf{a}|=0$ かつ $|\mathbf{b}|=0$ のとき、 $\mathbf{a}=\mathbf{0}$ かつ $\mathbf{b}=\mathbf{0}$ なので、 $1\cdot\mathbf{a}+1\cdot\mathbf{b}=\mathbf{0}$, よって \mathbf{a} と \mathbf{b} とは線形従属である。故に、 $\mathbf{a} // \mathbf{b}$ ならば \mathbf{a} と \mathbf{b} とは線形従属である。

\mathbf{a} と \mathbf{b} とが線形従属であると仮定する。 $p \neq 0$ または $q \neq 0$ でありかつ $p\mathbf{a}+q\mathbf{b}=\mathbf{0}$ である実数 p と q とがある。 $p \neq 0$ とすると、 $p\mathbf{a}=-q\mathbf{b}$, $\mathbf{a}=-\frac{q}{p}\mathbf{b}$,

従って定理 3.5.4 より $\mathbf{a} // \mathbf{b}$. $q \neq 0$ とすると、 $q\mathbf{b}=-p\mathbf{a}$, $\mathbf{b}=-\frac{p}{q}\mathbf{a}$, 従って定理 3.5.4 より $\mathbf{b} // \mathbf{a}$. どちらのときも $\mathbf{a} // \mathbf{b}$. (証明終り)

定理 3.7.3 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} について、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とが線形独立であるならば、任意の実数 p と q について、

$$p\mathbf{a}+q\mathbf{b}=\mathbf{0} \iff p=0 \text{ かつ } q=0 .$$

証明 \mathbf{a} と \mathbf{b} とが線形独立であるとする。

$p=0$ かつ $q=0$ ならば、

$$p\mathbf{a}+q\mathbf{b}=0\mathbf{a}+0\mathbf{b}=\mathbf{0}+\mathbf{0}=\mathbf{0} .$$

実数 p と q について $p\mathbf{a}+q\mathbf{b}=\mathbf{0}$ とする。仮に $p \neq 0$ または $q \neq 0$ ならば、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とは線形従属である。 \mathbf{a} と \mathbf{b} とは線形独立なので、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とは線形従属でない、よって $p=0$ かつ $q=0$ である。(証明終り)

定理 3.7.4 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a}, \mathbf{b} について、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とが線形独立であるならば、任意の実数 p, q, r, s について、 $p\mathbf{a}+q\mathbf{b}=r\mathbf{a}+s\mathbf{b}$ ならば $p=r$ かつ $q=s$.

証明 \mathbf{a} と \mathbf{b} とが線形独立であると仮定する。実数 p, q, r, s について、 $p\mathbf{a}+q\mathbf{b}=r\mathbf{a}+s\mathbf{b}$ とする。 $p\mathbf{a}+q\mathbf{b}-r\mathbf{a}-s\mathbf{b}=\mathbf{0}$, $(p-r)\mathbf{a}+(q-s)\mathbf{b}=\mathbf{0}$. \mathbf{a} と \mathbf{b} とが線形独立なので、定理 3.7.3 より、 $p-r=0$ かつ $q-s=0$, よって $p=r$ かつ $q=s$. (証明終り)